

従順ならざるプリンシプル —白洲次郎 自立への交渉—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

若き日のイギリス留学で白洲次郎(1902-1985)は実践的な国際感覚を身につけた。キングスイングリッシュを流暢に喋り、上流階級の子弟と交遊し、商社員となってヨーロッパ諸国と対等な交渉力を培った。

駐英大使だった吉田茂と知りあい、海外の情報を分析して第2次世界大戦に突入する日本の敗戦を確信する。戦時中は田舎暮らしで農作業に明け暮れた。戦後の占領下で外務大臣になった吉田の側近としてGHQ(連合軍最高司令官総司令部)と渡り合い、日本国憲法の作成に関与する。

吉田内閣では貿易庁長官に抜擢され、経済復興へ通商産業省を創設した。退任後は東北電力会長など数多くの企業の役員を歴任する。

長身でハンサムでダンディな白洲は気骨のある風のように颯爽とした男と称賛される傍ら吉田の太鼓持ち、陰謀家、外資の手先などと誹謗された。伝説の男の真意は果たしてどこにあったのか。

大使に信用された不良

白洲は兵庫県芦屋市に文平・芳子夫妻の次男として生まれた。父の文平はハーバード大学留学後、神戸に白洲商店を設立し、綿貿易で巨万の富を築き上げる。建築道楽で豪邸を次々と建て白洲将軍と持ち上げられた。

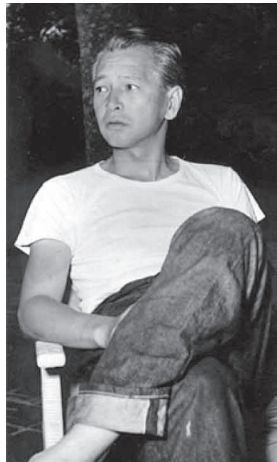
旧制神戸一中に進学し、野球やサッカーに汗を流す一方「僕は手のつけられない不良だった」と自認している。喧嘩相手の家に謝りにいくために

白洲家には常に菓子折りを用意されていたという。父からアメリカ車を買って与えられて乗りまわし、成績表の素行欄には「やや傲慢」「驕慢」「怠惰」などの文字が並んでいた。

卒業後の1919年、白洲曰く「島流しにされた」としてケンブリッジ大学クレア・カレッジに留学。同窓生からオイリーボーイと呼ばれるほど車に熱中し、伯爵家の御曹司で親友のロビン・ビングと愛車ベントレーでスペインまで旅行した。

1928年、昭和金融恐慌の煽りを受けて白洲商店が倒産し、やむなく帰国した。翌年、英字新聞のジャパン・アドバイザーの記者となり、樺山伯爵家令嬢の正子と結婚する。ふたりは父から贈られたイタリア車で新婚旅行に出かけた。のちに白洲正子は随筆家として知られるようになる。

満州事変が起きた1931年、セール・フレイザー商会に入社し、商談で頻りに渡欧する。1937年、日本食糧工業(日本水産)に移って取締役外地部長に就任。海外出張で駐英大使の吉田茂と懇意になり、イギリス大使館に泊まり込むようになった。吉田は親子ほどの年の差でありながら、負けん気



白洲次郎

が強く、思ったことを率直に口にする白洲を誰よりも信用した。地下室でビリヤードをやりながら夜更けまで世界情勢について語りあった。

戦争と占領のはざま

親英米派の吉田は1941年12月8日の日米開戦以前から戦争の回避を試み、開戦後も早期の終戦工作を進めていた。憲兵隊は吉田反戦グループを略してヨハンセンと呼び、白洲もその仲間だった。

1940年、開戦を見越して現在の東京都町田市にあった鶴川村の土地と農家を買取り、農作業に専念する。鶴川村が武蔵と相模の境にあったことから、無愛想をもじって武相荘と名づけた。兵役は旧知の元駐英陸軍武官を頼って免れた。戦時中は自分の畑で獲れた野菜を知りあいに配り歩く。新聞紙にくるんで玄関先に置き、家人が出て来るまえに黙って立ち去った。

1945年、外務大臣となった吉田に請われて終戦連絡中央事務局の参与に就任する。GHQとの交渉役として主張すべきことは頑強に主張し、GHQの報告書で「従順ならざる唯一の日本人」と評された。白洲はのちに首相となる大蔵官僚の宮澤喜一に「占領軍の言いなりになったのではないということを見せるために、あえて極端に行動しているんだ」と話している。

白洲はプリンシプルを何よりも重視していた。プリンシプルは原理、原則、主義などを意味する。「何でもかんでもひとつのことを固執しろというのはない。妥協もいっただろうし、また必要なことも往々ある。しかしプリンシプルのない妥協は妥協でなくて一時しのぎのごまかしにすぎない」とアメリカに迎合する風潮を批判した。占領下で白洲が追求したプリンシプルとは圧倒的な強者による支配からの自立にあったといっただろう。

1946年2月に日本政府が起草した憲法改正案はGHQに拒否され、逆にGHQ草案を突きつけられた。翻訳にあたった白洲はホイットニー民政局長に書簡を送って性急なやり方への抵抗を試みる。だが一蹴されて手記に「今に見ているという気持ち抑えきれず。ひそかに涙す」と書き記した。

新憲法に対して白洲は後年「この憲法は占領軍によって強制されたものと明示すべきであった」

と主張した。その反面「しかし、そのプリンシプルは実に立派である。マッカーサーが考えたのか^{しては}幣原総理が発明したのかは別として、戦争放棄の条項などその圧巻である。押しつけられようが、そうでなかろうが、いいものはいいと率直に受け入れるべきではないだろうか」と9条を評価した。

葬式無用 戒名不用

1948年、吉田内閣で白洲は貿易庁長官に登用された。海外輸出をめぐる汚職を摘発し、経済産業省の前身となる通産省を設立すると約半年で退任する。吉田はその働きを「白洲三百人力」と絶賛した。在任中、日本最大の日本製鐵広畑製鉄所のイギリス企業への売却を主導したものの、財界の実力者である日本製鐵の永野重雄と激しく対立して阻止された。早急な外貨獲得による貿易立国を構想していた白洲は「人に好かれようと思って仕事をするな。むしろ半分の人には嫌われるように積極的に努力しないと良い仕事はできない」「地位が上がれば役得ではなく役損というものがあるんだよ」と仕事に臨む姿勢を説いていた。

1951年5月に東北電力の会長に就任し、同年9月のサンフランシスコ講和会議に全権顧問として随行した。公的な場所以外ではTシャツとジーンズで通し、日本で最初にジーンズを穿いた男といわれるようになる。

晩年は軽井沢ゴルフ倶楽部の理事長となり、80歳までポルシェを乗り回した。スーツはヘンリー・プール、ライターはダンヒル、旅行鞆はルイ・ヴィトンとブランドを熟知していた白洲はファッション・デザイナーの三宅一生のショーにも出演する。「自分より目下と思える人間には親切にしろよ」と周囲に諭し、ゴルフ場でキャディや運転手に横柄な態度をとる相手を一喝した。妻との旅行後、体調を崩して83歳で他界したとき遺言状には「葬式無用 戒名不用」と記されていた。

亡くなる数年前、何日かにわたって古い鞆を持ち出し、中にあった書類を焼却炉で燃やしていた。長女が何を燃やしているのか尋ねると、それには答えず「こういうものは墓場まで持っていくものなのさ」と言って空に消え去っていく煙をじっと見上げていた。